

参考図書紹介

医療におけるハチミツ利用 Honey and Healing 邦訳版

ハチミツと代替医療. P. マン, R. ジョーンズ著 (松香光夫監訳). 2002. フレグランスジャーナル社. 123 pp. ISBN4-89479-059-9. 定価 1,600 円 (税別).

この本は創傷治癒でのハチミツの効果の研究の現状をまとめたものである. 原著はミツバチ科学 22 巻 4 号に紹介されているが, 日本語訳出版は一般読者にとってはありがたい.

私は長年創傷治癒に関わってきたが, これはほどハチミツの研究が進んでおり, またミツバチの専門学会があるとは知らず, 非常に興味深く読ませていただいた. 先の紹介とはなるべく重複を避け, 創傷治癒の立場から評を試みたい.

第 1 章は歴史的概観である. ハチミツは 4000 年以上の昔から, 古代エジプトやインドにおいて健康, 美容のみならず傷の手当てにも利用されていたという. 聖書にもハチミツに関する記載は豊富である. エジプトの治療法はギリシャさらにはローマに伝わり, 中世に至る. 中世は医学停滞の時代とされるが, 潰瘍治療にハチミツの使用を推奨した記載が残る. その後は近代医学の誕生とともに, 民間療法は省みられなくなったが, 最近になり代替医療, 自然食品の復活で, ハチミツも見なおされてきた.

第 2 章「なぜハチミツは薬として効果があるのか」(ワイカト大・Molan 博士)の第一部では最近の治験として, 傷への応用, 胃腸炎, 消化性潰瘍と胃炎, 眼科学での効能が述べられる.

皮膚の傷に用いた場合は, 従来の軟膏や皮膚材に比べすべての面で優れているというデータが提示されている. すなわち, ①治癒の促進効果, ②感染の抑制, ③傷を清浄にする作用, ④組織再生の促進, ⑤炎症の軽減等であり, 使用に際しての副作用を含め, 問題点はほとんどないということである. 各領域での効果も, これらに由来すると考えてよいようである.

第二部では, 第一部で述べられた臨床効能について, 試験管内, 生体内の実験結果から, そ

の作用機序について推論を試み, ①ハチミツ自体の抗菌作用, ②細胞活性による免疫能の増加, ③感染抑制や抗酸化作用による二次的作用以外にも, 直接炎症を押さえる効果, ④フリーラジカルの産生抑制と, 生成されたフリーラジカルの中和による抗酸化作用, ⑤肉芽形成促進と血管新生促進等が機序として挙げられている.

また最近では, モイスト・ウンドヒーリングといて, 傷を乾かさないうで湿潤環境を保つことの大事さがわかってきたが, ハチミツはこの湿潤環境を作るにも適していると思われる.

第 3 章「ハチミツはどのように傷をいやすのか」(カーディフ大・Cooper 博士)では, 主として現在の創傷治癒の基礎知識と, その中でのハチミツの効果の位置付けを示している.

第 4 章「傷の治癒/修復に果たすハチミツの役割」(カーディフ大・Jones 博士)では, 主としてハチミツのマクロファージの活性化について, 第 5 章は白内障に対するハチミツの治療効果, 第 6 章は火傷の治療の有効性を扱っているが, すでにハチミツを使った被服材が 2 種類も発売されているということである.

第 7 章はボツリヌス菌との関連である. ボツリヌス菌の芽胞が混入している危険があるので, 1 歳未満の乳児にはハチミツを食べさせぬよう, これまで小児科医は指導してきたが, あまり因果関係は明確ではないという.

全体としていいことづくめの感はあるが, 専門の立場からしても, 早速試してみようと思わせるだけのデータや文献は豊富にある. それならなぜまだ普及していないのか不思議に思うが, やはり民間療法に対する偏見かも知れない.

ところでカーディフは世界でも有数の, 創傷治癒研究のメッカである. 今度その創傷治癒センター主任の K. Harding 教授にお会いしたら, ハチミツ利用の経験はおありか, また教授のお考えもぜひ伺ってみたい. (塩谷 信幸)